

「共に生きる社会」の実現をめざして

IUHW

International University of Health and Welfare

vol. **72**
January
2008

「新春に語る二〇〇八」

国際医療福祉大学理事長

高木邦格

国際医療福祉大学学長

谷 修一

国際医療福祉大学三田病院院長
国際医療福祉大学副学長

北島政樹

国際医療福祉大学大学院院長

開原成允



C O N T E N T S

2 新春に語る 2008

国際医療福祉大学理事長 高木邦格

国際医療福祉大学学長 谷修一

国際医療福祉大学三田病院院長／

国際医療福祉大学副学長 北島政樹

国際医療福祉大学大学院院長 開原成允

6 小田原キャンパスレポート 第6回

部・サークル活動真っ盛り

7 大川キャンパスレポート 第11回

言語聴覚学科准教授 為数哲司

ボランティア部

8 研究最前線 第5回

大学院教授 高嶋幸男

9 Topics & Columns

中山広宣教授が奨励論文賞を受賞／中越沖地震募金のご報告／医療経営管理学科創立十周年記念シンポジウム／医療福祉学科主催 社会福祉フォーラム／薬学部フォーラム／助産学実習（保健医療学部看護学科）／国家試験の全員合格を目指して（保健医療学部言語聴覚学科）／フランスから視能訓練士が来訪（視機能療法学科）／大学院オープンキャンパスin福岡SC／学長杯英語スピーチコンテスト／学生&企業研究発表会／生活安全講話・セクハラ防止講習会／日本てんかん学会／新しい介護を創る研究会／中国リハビリテーション研究センター一行が来学／NITEとMOU協定締結／きょうだいが病気になることもちち<コラム>「私の主張」第7回（保健医療学部作業療法学科助教 林由美子）／<コラム>「私のおすすめ本」第7回（小田原保健医療学部教授 谷浩明）／<コラム>「サークル紹介」第3回 大田原本校ピアカウンセリング部

17 施設インフォメーション

<国際医療福祉大学病院>第1回地域医療連携懇談会／<国際医療福祉大学三田病院>第1回一般公開講座、医療安全推進週間／<国際医療福祉大学熱海病院>院内感染防止対策講習会、東伊豆脳卒中ミーティング、院内学術懇話会／<山王病院>リニューアル進行中／<化学療法研究所附属病院>看護職・再就職支援セミナー、院内看護研究発表会、「NANDA-I看護診断」研修会／<みずま高邦会病院>維持期リハビリテーション

20 医療福祉チャンネル774

卒業式、入学式のご案内

●表紙の写真は大田原本校写真部の鈴木慎平さん(理学療法学科3年)の作品です。



新春に語る 二〇〇八

国際医療福祉大学理事長 高木邦格

―昨年の二月に国際医療福祉病院が正式に大学の附属病院となり、三田病院、熱海病院と合わせ、大学の附属病院は三つとなりました。

高木理事長（以下敬称略） 国際医療福祉病院

は大学の本校、学生のいちばん近くにある正式な附属病院となることで、学生の教育、研究の面でますます充実していきます。

―四月には国際医療福祉大学三田病院に北島政樹先生が病院長として着任されました。さらに大学院の副大学院長として金澤一郎先生が就任されました。

高木 お二人の着任は大学を強化するのに非常に喜ばしいことでした。北島先生は慶應義塾大学の医学部長、日本外科学会の会長を、また昨年は万国外科学会会長も務められ、日本の医学界有数の方です。北島先生には大学の副学長兼三田病院院長ということで、三附属病院の統轄また病院と大学との連携を図るなど、色々な面

でベスト8に入り、これだけでもびつくりしたのですが、福岡のチームがもう一つの組織の全国大会で優勝しました。非常に明るい話題でした。

―文武両道の国際医療福祉大学ですね。さて栃木の本校では新薬学部棟が建設中です。

高木 薬学部六年制を前提に建物などを作ったのですが、さらに充実させるために現在、もう一棟新しく建てているところです。

―学部だけでなく、大学院における生涯学習教育を重視して、東京サテライトキャンパスに看護師の生涯学習センターが開設されました。

高木 これからは新卒者への教育だけでなく、一生勉強を続けていく仕事を持った方への研修機能も果していかなばならないと考えています。―文部科学省の「がんプロフェッショナル養成プラン」に採択されました。

高木 文科省のこのプランには全国の大学の医学部やコメディカル養成の大学が応募しました。われわれは自治医科大学と組んで応募し、採択されました。質の高い教育が評価されたものと思います。

―二〇〇八年のことを伺います。福岡のビッグプロジェクトについて聞かせてください。

高木 福岡タワーやヤフードームがあり、博多湾に面するシーサイドももち地区にアメニティの充実した全室個室の病院を建設し、また福岡市内に点在していた専門学校を集約します。専門学校には看護学科を新設します。このプロジェクトは福岡だけでなく、九州中から注目を集め、先日も九州全域のテレビ放送でこのプロジェクトが紹介されました。

―東京では、新宿けやき園がオープンします。高木 これは全室個室の特別養護老人ホームで、認知症の方が利用できるデイサービスや障害を持った方の療護施設を併設します。福祉施設ではあるが、山王病院や三田病院と協力して医療

面でも充実した施設として整備していきます。

―青山一丁目の山王メディカルプラザの建替え工事も順調に進んでいるようです。

高木 ここはまさに山王病院発祥の場所ですが、老朽化に伴い新築することになりました。来年にはオープンできると思います。

―三田病院で新病院の計画がありますが。

高木 今、最終的な設計を急いでおり、できれば一年以内くらいに着工できるよう準備をしているところです。北島先生が指揮を取っている病院ですから、日本を代表するがん治療の拠点となるよう進めています。

―医療界に目を転じると、診療報酬の改定など、厳しい状況が続いています。

高木 公的医療機関の大半が赤字、民間病院も半数以上が赤字に転落している状況で、国の政策が医療、福祉に目が向いていない。先進諸国の中で日本の医療費は最低レベル。医療崩壊という言葉がよく聞かれ、非常に心配です。そういう中でわれわれは患者様に喜ばれる医療をきちんと提供していくしかありません。

―医師の育成では大きな夢があるそうですね。高木 高校卒業後、六年間で医師を育成する制度は、これはこれであっていいと思うが、四年制大学を一度出て、それから四年間で医師になるというアメリカ型のコースも併設して、制度間競争をしたらいいと考えています。

―定員割れの大学が増えるなど、教育界も厳しい状況に置かれています。

高木 国際医療福祉大学は医療、福祉の総合大学として臨床の現場、実習機能の強い大学を目指しており、そうあり続けなければいけない。そのためには、教職員一同、総力を挙げていい教育をきちんとしていく、またいい教育環境を作っていく、研究もきちんとしていく、ということです。

―今や六〇〇〇人の職員と七〇〇〇〇人の学生

でこ活躍頂いています。金澤先生は学術会議の会長で、日本の学術分野のトップに立っておられ、皇室の医務主管でもいらっしゃる。副大学院長として着任頂くことで、学術面での機能強化にとってもよかったですと思います。

―昨年、栃木の大学構内に特別養護老人ホームが、東京にはグループホームが誕生しました。

高木 大学の敷地の中に特別養護老人ホーム「おおたわら風花苑」を作りました。医療福祉を学ぶ学生が大学構内のこの風花苑でお年寄りの介護などを実習し、また地域の方々にも喜ばれる、そういう施設です。一方、「グループホーム青山」が入る青山一丁目スクエアの中にはわれわれの大学院や港区の図書館があり、山王病院や三田病院も近い。これらが連携しながらユニークなグループホームを運営していきたい。

―千葉県にある化学療法研究所附属病院も新しい病院としてリニューアルしました。

を擁するグループの理事長として心に抱いていらつしやる理念を改めてお聞かせください。

高木 「生命の尊厳、生命の平等」という高邦会の理念、「人間中心」「国際性」「社会に開かれた」「共に生きる社会を築く」という大学の理念の中で教育をしていく。そして学校だけではなくて、教育施設、福祉施設が連携しながら社会のニーズに応えていく。また弱者の方々や病気の方々に愛情を持てるような学生を輩出していく。このように考えています。

● 国際医療福祉大学学長 谷修一



―昨年は福岡リハビリテーション学部言語聴覚学科が新たに開設されました。地元でも大きな期待が寄せられているのではないのでしょうか。谷学長（以下敬称略） 四年制大学の言語聴覚学科は福岡県では初めてということもあり、地元の期待も大きかったわけです。いい教員にもたくさん来て頂きました。学科長には言語聴覚士協会の深浦先生にお出で頂き、順調にスタートできたと思っています。

―福岡リハ学部では新たな校舎が加わるなど、環境のほうも新しくなりましたね。

谷 幸いなことに周辺の高校の用地を取得して体育館や教室、グラウンドなどを整備することができました。学部ができたときからかなり環境のよい所でしたが、教育設備も含め非常に充実してきたと思っています。

高木 この化学療法研究会というのは天皇家と三井家に関係の深い名門です。呼吸器分野、消化器分野を診療の柱とするほか、がんの最新化学療法も行ったため、設備やスタッフを充実させ、昨年八月に全面リニューアルしました。

―大学のお話を伺います。昨年は福岡リハビリテーション学部言語聴覚学科ができました。

高木 九州には理学療法、作業療法、言語聴覚の三分野がそろったリハビリの総合大学がありませんでした。お隣の佐賀大学に言語聴覚士協会会長の深浦順一先生がいらつしゃって、学科長に就任頂き、言語聴覚学科を開設しました。施設面ではグラウンドや体育館を整備したことで、学生生活がより充実しました。

―その環境整備の成果でしょうか。福岡の軟式野球部が全国大会で優勝しました。

高木 学生の軟式野球の全国組織は二つあり、本校の軟式野球部がそのうちの一つの全国大会

―その成果でしょうか。軟式野球部が全国大会優勝という輝かしい成績をおさめました。

谷 初出場が優勝ということではびつくりしました。また、大田原本校の軟式野球部も別の全国組織の全国大会でベスト8まで進出しました。この夏の全国大会で、福岡、大田原の二つの野球部がともにいい成績をおさめたことに驚き、そして大変喜んでおります。

―谷学長も球場まで応援に行かれたと伺いました。

谷 大田原本校が出場した一回戦に八王子の球場まで行きました。本当に選手たちの野球が上手く、びつくりしました。

―文武両道で本当に素晴らしいことです。スポーツの活躍とはまた別に、雑誌の特集で、就職に強い大学トップ一二〇の中の一四位にランクインしました。

谷 去年の就職率が九四%でしたが、これは事実上、ほとんど一〇〇%です。そういう意味で毎年、全国的にもトップ一〇前後に入るくらいの順位は確保していると思います。学生一人当りの求人数が約七三人と、多くの企業や施設から求人を見ており、大変ありがたいことだと思っています。

―求められる人材が育っているという嬉しいことです。

谷 教育をする立場から言えば、教育の内容がいいから、ということですが、今まで卒業した約七〇〇〇人の卒業生たちが全国の病院や医療機関、福祉施設等で働いてきて、その実績が多くの求人数に反映していると思います。卒業生たちの活躍のおかげだと思っています。

―もう一つの強みと言えば「現場で学べる臨床実習」。かなり充実したカリキュラムだと伺っています。

谷 これは大田原本校だけじゃなく、福岡リハ学部、これから本格的な実習が始まる小田原保

健康医療学部でも同じことですが、周辺に附属病院や福祉施設など多くの関連臨床施設がたくさんあり、そこで学生の実習ができるということは大きな強みだと思います。われわれの意識としても、やはり臨床に強い学生を育てていくということがありますので、いわゆるチーム医療、チームケアを視野に入れ、色々な職種と一緒に実習をするということをこの数年来やってきました。これからも実習面を充実させ、現場に強い、医療や福祉のことをよく分かった学生を世の中に送っていきたいと思っています。

が非常に評判がよく、さらに五年の延長が決まっています。昨年は高木理事長も現地に呼かれて、色々な方と意見交換などをされました。さらに、大学院の助産師のコースでは、初めてタイにあるマヒドン大学と連携をして、本学の学生が現地で実習を行いました。マヒドン大学の人も昨秋、本学を来訪したりして、これから発展していくのではないかと思います。また、現在、本学には留学生が六〇名ほどおります。留学生に対しては、大学の支援だけでなく、地元の大田原市からも色々な支援をして頂いています。そういうことも本学の国際性を高めていくということに大変役に立っていると思います。

谷 大田原本校では以前よりイブニングタイム公開講座を各学科が持ち回りでやっており、昨年は視機能療法学科が担当しました。高大連携も福岡リハ学部では大川樟風高校と、本校では大田原女子高校と行っています。それから小田原保健健康医療学部では昨年初めて、地元の小田急電鉄と協力して、障害者あるいは高齢者、目の不自由な人が電車に乗り降りする際の体験を実際に小田急電鉄の職員や学生にしてもらいました。これは周りの方々に対していい影響を与え、小田急電鉄の皆さんにも大変役に立ち、そして結果的には障害者や高齢者の方によりよいサービスができる、そういうことにつながるのではないかと思います。

が非常に評判がよく、さらに五年の延長が決まっています。昨年は高木理事長も現地に呼かれて、色々な方と意見交換などをされました。さらに、大学院の助産師のコースでは、初めてタイにあるマヒドン大学と連携をして、本学の学生が現地で実習を行いました。マヒドン大学の人も昨秋、本学を来訪したりして、これから発展していくのではないかと思います。また、現在、本学には留学生が六〇名ほどおります。留学生に対しては、大学の支援だけでなく、地元の大田原市からも色々な支援をして頂いています。そういうことも本学の国際性を高めていくということに大変役に立っていると思います。

谷 一つは、二年前から始めたベトナムでの草の根協力として、ホーチミン市にあるチーライ病院のリハビリテーションの人たちと一緒に本学の林先生が地域リハビリテーションを展開しています。それから、前々からやっている中国リハビリテーション研究センターのプロジェクトがあります。このプロジェクトは、五年が終わったのです

が非常に評判がよく、さらに五年の延長が決まっています。昨年は高木理事長も現地に呼かれて、色々な方と意見交換などをされました。さらに、大学院の助産師のコースでは、初めてタイにあるマヒドン大学と連携をして、本学の学生が現地で実習を行いました。マヒドン大学の人も昨秋、本学を来訪したりして、これから発展していくのではないかと思います。また、現在、本学には留学生が六〇名ほどおります。留学生に対しては、大学の支援だけでなく、地元の大田原市からも色々な支援をして頂いています。そういうことも本学の国際性を高めていくということに大変役に立っていると思います。

引くためにいくつかの病院を視察しました。院内では、各病棟の責任者、外来の責任者、放射線や内視鏡などの責任者を集めてヒアリングをしました。そろそろ図面を引き始めていますし、三年後くらいには一三階建ての素晴らしい病院が完成します。楽しみにしててください。

が非常に評判がよく、さらに五年の延長が決まっています。昨年は高木理事長も現地に呼かれて、色々な方と意見交換などをされました。さらに、大学院の助産師のコースでは、初めてタイにあるマヒドン大学と連携をして、本学の学生が現地で実習を行いました。マヒドン大学の人も昨秋、本学を来訪したりして、これから発展していくのではないかと思います。また、現在、本学には留学生が六〇名ほどおります。留学生に対しては、大学の支援だけでなく、地元の大田原市からも色々な支援をして頂いています。そういうことも本学の国際性を高めていくということに大変役に立っていると思います。

北島 今年ではできれば、高齢化社会において男性の疾患である前立腺がん、前立腺炎を中心に治療していく前立腺センターを何とか作ろうと考えています。

が非常に評判がよく、さらに五年の延長が決まっています。昨年は高木理事長も現地に呼かれて、色々な方と意見交換などをされました。さらに、大学院の助産師のコースでは、初めてタイにあるマヒドン大学と連携をして、本学の学生が現地で実習を行いました。マヒドン大学の人も昨秋、本学を来訪したりして、これから発展していくのではないかと思います。また、現在、本学には留学生が六〇名ほどおります。留学生に対しては、大学の支援だけでなく、地元の大田原市からも色々な支援をして頂いています。そういうことも本学の国際性を高めていくということに大変役に立っていると思います。

国際医療福祉大学大学院院長 開原 成允
—大学院の人氣が高くなっていますね。
開原 大学院長（以下敬称略） 毎年学生数が増え、大変うれしく思っています。昨年は在籍者がちょうど五〇〇名になりました。博士課程が約二四〇名、修士課程が約三六〇名です。修士生を見ますと、昨年初めて「生殖補助医療胚培養分野」から六名の修士生を出しました。大学



開原 成允 国際医療福祉大学大学院院長

国際医療福祉大学三田病院院長 北島 政樹
—去年、三田病院に着任されたわけですが、病院の印象はいかがでしょう。
北島 院長（以下敬称略） 三田病院には東京都の中核病院、がん拠点病院を目指すという大きな目標があります。この病院の特長として内科系と外科系がいっしょになって診療科をセンタリー化し、その中で非常に技能のすぐれた各医師が診療に当たる。これが大きな特長だと思います。



北島 政樹 国際医療福祉大学三田病院院長

北島 病気の発見、診断が大事です。その診断によつてどう治療するかを決める。二十一世紀に入つてからは、患者さんの病気の進行度とか、その程度によつて治療法が変わる。個別化治療、これがキーワードです。特に力を入れているのは画像診断システムです。三田病院と国際医療福祉大学病院と化研病院とを結んで画像を共有する。こういうシステムが動いています。

北島 グループのそれぞれの病院が特色を出してやっつけていかなければいけない。しかし同時に、連携がないといけない。昨年、三田、山王、国福、熱海、化研の五病院の院長と事務長が一堂に会する医療連携懇談会を設けました。定期的に集まり、お互いが情報を共有していく。教育施設でもあるので、教育のカリキュラムも共有し、皆でいメデイカルスタッフの育成を目指しています。

開原 四月に臨床心理士を育成する「臨床心理学専攻」を開設しました。このコースは日本でも数多く開設されていますが、これまでは文科系の大学に多くあったコースです。今日、臨床心理士が医療施設でも活躍の場を増やしており、医療に強い臨床心理士を育てたいと思つて本学で開設したわけです。

開原 四月に臨床心理士を育成する「臨床心理学専攻」を開設しました。このコースは日本でも数多く開設されていますが、これまでは文科系の大学に多くあったコースです。今日、臨床心理士が医療施設でも活躍の場を増やしており、医療に強い臨床心理士を育てたいと思つて本学で開設したわけです。

部・サークル活動真っ盛り



平成一九年度に入り、小田原キャンパスでは、部やサークルの学生団体活動が昨年以上に活発に行われている。最近の主な活動内容をレポートする。

軟式野球部が快進撃！

一月二十四日（土）、秦野球場において全日本大学軟式野球連盟主催・南関東リーグ一部二部入れ替え戦が行われた。軟式野球部（以下野球部）は開学後すぐ発足し、栃木本校野球部とキャンパス間交流などを積極的に行ってきた小田原保健医療学部の急先鋒である。野球連盟には今年加盟

したばかりであるが、南関東二部リーグで全勝し、一部の湘南工科大学と入れ替え戦を行うことになったのである。

一部リーグ昇格を目前に在學生が多数応援に駆けつけた。なかでも一際大きな声援を送っていたのは、野球部顧問である理学療法学科の黒澤学科長。試合前の練習中から部員に檄を飛ばし、緊張からか足がつりそうになった部員には自ら課外授業とばかりに足をマッサージする。

いよいよ試合開始。先攻は湘南工科大学。先発のマウンドに立つのは理学療法学科二年富田浩輝君。富田君はキャプテンであり、これまでのキャンパス間交流や連盟加盟を一手に引き受け実行してきた、他メンバーからの信頼も厚い不動のエース。立ち上がりから巧打湘南工科大学の攻撃を全く寄せ付けず、スコアボードにゼロを刻んでいく。

後攻の国際医療福祉大学。まず大きな声援を受けたのはキャッチャーでムードメーカーの理学療法学科二年豊田大輔君。右中間を破る三塁打を放つと、次バッター亀井友博君の打席で相手キャッチャーがパスボール。国際医療福祉大学に待望の先制点が入った。二回の裏にも、野球部一のパワーヒッターで看護学科二年布川祥司君の豪快な打球を相手野手がさば

ききれず出塁すると、理学療法学科二年中島陽平君のヒットで加點。前半戦は二点のリードで後半戦に突入した。

先発した富田君は九奪三振と好投、湘南工科大学の攻撃を見事〇点に抑え、七回表からは二番手として理学療法学科一年青島高志君がマウンドに上がる。青島君は速球が武器の本格派右腕。湘南工科大学の攻撃を力でねじ伏せていった。国際医療福祉大学は八回裏にも二点を加點、終わってみれば四対〇で快勝。見事加盟一年目で一部リーグ昇格を果たした。

ボランティアサークル「TOWN WORK」部長、ベトナムへ

一〇月二八日（日）、かながわ県民センターにおいてベトナム青少年海外派遣団活動報告会が開かれた。主催は社団法人神奈川県青少年協会、神奈川県青少年、青少年リーダーをベトナムに派遣し、ボランティア活動や協働作業等のプログラムを通して、「国際理解」「国際協力」などの学習及び交流活動を実施し、異なる文化や価値観に対する理解の促進と次代を担う青少年リーダーの育成を図ることを目的としている。県下では大学生枠として三名、高校生枠で八名、中学生枠で三名が選出され、小田原保健医療学部から作業療法学科二年森みなみさんが選ばれて、夏休み期間の一週間ベトナムでの事業に参加した。その内容は、ストーリーチルドレンとの交流、施設でのボランティア活動、少数山岳民族の村・現地高校・日本語学校等での文化体験交流、枯葉剤被害者施設の子どもたちとの交流



「TOWN WORK」の活動を紹介するパネルの前の森さん。

など多岐にわたった。

報告会では貴重な体験談が披露された。特に、ベトナム戦争時に使用された枯葉剤の影響で多くのベトナム人が今も苦しんでいることには衝撃を受けたよう、森さんの報告でも、現在もお六〇人に一人が奇形児で生まれてくることの悲惨さを感じる旨の発表があった。発表終了後はグループディスカッションが行われた。今回の事業での経験を踏まえ、「生きること」をテーマに活発な意見が交換された。

森みなみさんはボランティアサークル「TOWN WORK」の部長をまとめており、ボランティア活動や社会福祉協議会などで積極的な活動を行っている。貴重な経験をした森さんが所属する「TOWN WORK」の今後の活躍に期待したい。（学務課 村山京三）

言語聴覚学科開設より間もなく一年を迎えるにあたって

福岡リハビリテーション学部
言語聴覚学科准教授
為数哲司



能動的な実習を目指して臨んだ。実習開始当初は全員が非常に緊張していた。しかし、患者さんとコミュニケーションを取るなど、貴重な体験をさせていただいたことよって、顔つきも少しずつ変わってきたようであった。

昨年の春に言語聴覚学科がスタートして間もなく一年を迎えようとしている。この間、学生達は新しい環境に適応するためにいろいろエネルギーを使ったに違いない。まず、前期には毎週作文課題に取り組んだ。文章を書くことがあまり得意でない者にとつては結構大変だったであろう。その甲斐あって日本語の形式がずいぶん整い、書くことに慣れてきたように感じる。しかし、まだ問題点も多く、最初の定期試験では、勉強不足が身にしみた者も多かったはずである。

定期試験が終了した翌日の八月三日より関連の七施設で施設見学実習を行った。初めての実習なので、オリエンテーションは念入りに行った。見学には特に各自で自己評価表を作成し、マナー面への意識づけと

八月九、一〇日は、原鶴の研修所で教員学生全員参加の宿泊研修を行った。研修の目的は学科内の親睦を図るとともに実習報告会も兼ねていた。到着後すぐに炎天下パークゴルフで遊び、大いに楽しんだ。午後からは実習のまとめと半数の班による発表を行った。初めてのプレゼンテーションではあったが、質問も多く、活発なやり取りが行われた。夕食は女子学生有志が作ったカレーであった。おいしいカレーが振舞われ、満腹となった後は船に乗り、原鶴温泉名物の鵜飼いを見学した。私も含めほとんどの者が初めての体験であったが、鵜匠の巧みな技と鵜達のかいがいしい働きぶりに感激しながら楽しいひと時を過ごした。その後は花火その他自由行動の時間を設けた。

また九月に再試予定の学生全員に個人面談を行った。その指導に数時間前の行楽気分もいっぺんに吹き飛んだはずである。翌日発表予定の半数の班は、準備が深夜にも及んだ。中には完全に徹夜した学生も数人いた。実習や発表会を通して身に付けたことの一つに、先を見通して行動する段取り力がある。最近では、オリエンテーションなどを行う時に指示をしなくても、身だしなみや所持品について、適切な段取りができるようになってきている。

後期に入り、学生は大学生活にだいぶな

新たなボランティアのフィールドへ

理学療法学科二年／ボランティア部部長 隠塚雅臣

今年度は、一年生の入部後、部員数が倍増し、一・二年生だけでも五三名となった。部員が増えたことで、取りまとめていくのが大変な場面もあり、自分の力不足を感じることもあった。しかし、この間の活動を通して、私自身はもちろん、部員一人ひとりが成長したようにも感じる。

今年も様々な活動に参加したが、その中では、福岡県小都市にある重症心身障害児者通園事業「ベアクラブ」が行う一泊二日のキャンプが特に印象深かった。九月初めに参加したこのキャンプは、甘木のB&G海洋センタ―で行われた。プールで泳いだ後は、フォトスタンド作りなどに参加、夜にはキャンプファイヤーを行った。

参加者の多くは車椅子での移動を中心にしており、言葉もあまり上手く話すことができず、初めは、お互いにコミュニケーションを取るのが大変だった。また、車椅子からバスの座席に移動するのにも、慣れないため、二、三人がかりと、なかなかス



ベアクラブ参加者集合

ムーズにいかなかった。しかし、一日活動を共にするうち、キャンプファイヤーをする頃には、身振り手振りを交えながら、コミュニケーションが取れるようになった。ベアクラブには生活支援員、看護師、PT、OTなどのスタッフがいて、「発作が起きた場合はこのような対応で」、「移動の際の抱きかかえ方はこのような対応で」といった、実践的な指導を受けることもでき、大いに勉強になった。

ボランティアに参加していつも嬉しく感じるのが、利用者の笑顔を見たときである。キャンプファイヤーの時に、一緒に手を叩きながら笑えたことが一番の思い出である。部員一同、ボランティアという活動を通して、色々な人と接し、何かを感じ取り、学んでいきたい。そのためにも、今後地域を越えて幅広く、色々な活動へ参加していきたい。

研究最前線

第五回

脳を科学する

高嶋幸男 教授
トキヤンバス ション学分野

参加研究者

高橋 精一郎（国際医療福祉大学大学院教授）、
甲斐 悟（国際医療福祉大学大学院講師）、
田 誠一（国際医療福祉大学大学院修士課程
修了、柳川リハビリテーション病院）、小川
ユミ（国際医療福祉大学大学院修士課程修
了、福岡国際医療福祉学院）、奥田 憲一（国
際医療福祉大学大学院修士課程修了、柳川
療育センター）、中村 公紀（高木病院）

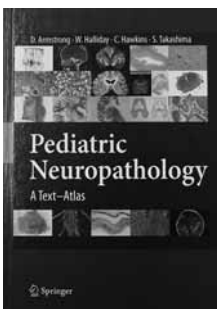
本学大学院の福岡・大川サテライトキ
ャンパスでは、理学療法、作業療法、リ
ハビリテーション学など、それぞれの領
域で、あるいは領域間ネットワークを通
して、様々な研究が行われています。今
回ご紹介するのは、高嶋幸男教授の「脳」
の研究と、リハビリテーション分野の研
究とが融合した国際医療福祉大学ならで
はのテーマです。



院生を指導中の高嶋教授（手前）

高嶋幸男教授は、長年小児、特に新生児
の脳をテーマに研究に取り組んでこれま
した。その集大成とも言える『Pediatric
Neuropathology A Text-Atlas』を100
七年四月に出版するなど、この分野におい
ては、世界的にも注目を集める研究者の一
人です。

今世紀は「脳の世紀」と言われるなど、
「脳」に対する研究が広がっています。なか
でも高嶋教授は、一、脳を病理学的に解明
する研究と、その一方で、二、近赤外線分
光トポグラフィーを使った血流量の変化に
よる脳機能の研究、という二つの視点から
「脳」を科学しています。



脳を病理学的に解明する研究

脳の組織には、大きくわけて①ニューロ
ンといわれる神経、②血管、③グリアがあ
りますが、そこに傷害をうけると、その部
分は細胞死に陥ると同時に、その一方で、
自らを修復する動きもあります。それは、
まるで損傷時にスイッチが入ったように、
時間経過と共に進行します。同時に、損傷
に対して、組織細胞学的な修復・再生も進
んでいます。

一方、神経系には、ネットワークがある
ので、末梢から機械的に刺激しても、その
刺激は中枢に達し、神経伝達物質等を放出
し、次々に細胞を活性化して、修復や再生

現象に影響すると考えられます。しかし、
その詳細なメカニズムは十分には分かって
いません。

神経病理学的に、あるいは神経生理学的
に、ヒト新生児と成人の脳について研究が
進められています。幹細胞のマーカーを用
いた研究では、幼若な脳ほど、修復能力、
つまり可塑性は神経細胞やグリアに、明瞭
かつ広範に起こることが認められています。

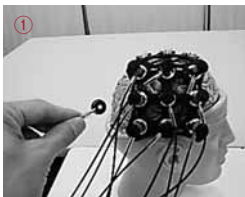
これまで、胎児期にしか出ないと言われ
ていた細胞が、成人の脳でも修復の際に出
ることなどがわかってきました。脳の細胞
についての研究はまだこれからで、日
本人研究者が発見したある細胞には特別な
名前が付けられました。それはまるで宇宙
で新たに発見される星のようなものです。
未解明の「脳の世界」に、高嶋教授をはじ
めとした研究者は挑んでいます。

また、成人でも類似の細胞反応による修
復が認められますので、時間経過に伴う変
化とリハビリテーションの関係も追究中
です。リハビリテーションによって、実際
に脳の修復を行うことが明確になれば、リハ
ビリテーションの必要性は、より重要性が
増すと思われます。

近赤外線分光トポグラフィーを使った
血流量の変化による脳機能の研究

次に、脳の中の血管の血流量によって、
脳を科学する仕組みをご紹介します。脳梗
塞のリハビリテーションにおいて、予後の
判定は、身体機能の改善によって評価さ
れますが、脳の中の機能の改善をみるこ
とができれば、臨床的にも大いに役立ち
ます。最近では、脳機能は、PET、MRIとい
った画像診断装置などを用いて観察され

すが、それぞれの診断応用には特徴があり
ます。が、多くは一時的な機能像として捉
えられます。



近赤外線分光測
定トポグラフィー
（写真①）は非侵襲
的で、脳機能の変
化が動的に観察さ
れるので、リハビ
リテーションへ応
用され、利用され
ることが期待されます。タイプの練習前後
の作業量と脳機能の変化を観察した結果、
練習効果が脳機能でも認められ、意欲の関
与も何われることが報告されています（小
川修士論文）。

脳梗塞後のリハビリテーションの効果に
関して、近赤外線分光トポグラフィーで測
定を行うと、回復期に脳機能改善がみられ
ることは当然ですが、慢性期でも改善がみ
られ、脳の可塑的な変化が何われます（永田
修士論文）。脳損傷回復の予測に関する課
題については、日立メデイクと共同研究中
です。

これまで脳の研究というと、脳の基盤研
究、あるいは臨床での研究と、どちらかと
いえば、両極での研究が中心でした。しか
し、本学部のように、基盤と臨床を連携さ
せた、いわゆる橋渡しの研究の分野は、
生活により密着した問題提起を通して、私
達の生活そのものを進化させてくれる研
究になることと思います。

（この文章は、高嶋教授執筆の論文およびインタビュー等を交えて、九州広報・原田ちはるが作成いたしました）

トピックス

Topics

中山広宣教授が
日本臨床神経生理学会の
奨励論文賞を受賞

本学大学院で作業療法学分野を担当す
る中山広宣教授が、日本臨床神経生理学
会の二〇〇七年度「奨励論文賞」を受賞
し、一月二二日、栃木県宇都宮市で開
かれた同学会での授賞式に参列した。

奨励論文賞は一九九八年に創設された
もので、精神、神経科学の分野における
優れた研究に対して贈られる。受賞対象



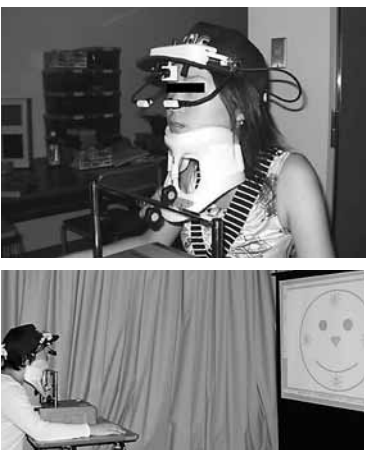
授賞式に臨む中山教授（左）

は、『臨床神経生理学』第34巻第6号に発
表された「恐怖症性不安障害者における
薬物療法と視覚認知訓練の併用による効
果の神経生理学的検討―索眼球運動評価
を用いて―」という論文である。

中山教授は「目は口ほどに物を言う」と
か、目が泳ぐなど、昔から言われる言葉
に象徴されるように、「目」には様々な人
間の機能が反映されていて、行動との関
係が深い」と考え、「眼球運動からみた視
覚認知機能と行動」の研究を続けている。

今回の研究は、アイマークレコーダー
という、視線の動きを捉えることができ
る機器（写真②）を使用した客観的評価
と、訓練によって、対人恐怖や広場恐怖
といった恐怖症性不安障害という心の障
害を持つ患者の症状を和らげる目的で行
われた。

これまで、心の障害は、患者本人が自
身の障害を客観的に捉える術はなかなか
なかった。これに対し、中山教授の研究
では、患者（被験者）自身が自らの目の
動きを確認し、その症状を確認しながら、
回復を目指していく。



上…写真②アイマークレコーダーを装着
下…写真③スクリーンを見ながらの訓練

今回は、七名の恐怖症性不安障害患者を
対象として研究を行った。まず、スクリ
ーンを見られる位置に、アイマークレコ
ーダーを装着した患者が着席する（写真
③）。患者には、「福岡から太宰府まで、
切符を購入して電車に乗る」という課題
が与えられる。スクリーンには事前に撮
影を行った路線図や券売機、改札口など
の動画が映し出される。この課題をこな
すためにやらなければならない事を、ス
クリーン上の映像を見ながら、患者はイ
メージする。具体的には、路線や太宰府
までの金額を確認したり、改札を捜した
りといった動きが予想される。そしてそ
の際の目の動きが、アイマークレコーダ
ーを通して分かるのである。加えてビデ
オで、被験者の目の動きが録画されてお
り、患者は自身の目の動きを確認できる。
本来であれば、路線や料金を確認して
切符を購入、改札へ向かい乗車、という
のがスムーズな流れであるが、障害のあ
る患者の目の動きは、課題を遂行するた
めの必要な部分へ注意が向かず、路線を
確認できない、表示金額をうまく捜すこ
とができない、といった傾向があり、視
線は落ち着かない。この録画されたビデ
オを患者自身が見て、初めて「障害」を
認識するのである。この認識が訓練の動
機付けとなり、訓練とフィードバックが
繰り返されていく。訓練は薬物療法と同
時に行われ、引き続き、アイマークレコ
ーダーを使い、同じ場面を見ながら、口
頭でのアドバイスなどを行ったり、患者
の気分を確認し合ったりし、また、過去
の視線の動きなどと比較しながら、改善
している点などを示していく。

「訓練は、半年から一年ほど経過を追い
ながら続けられました。当初は、不安で
外出も億劫だったという患者が、行動範
囲が広がったという事例もできました」と
中山教授。また、「この研究で特に評価
された点は、主に評価機器として用いら
れていたアイマークレコーダーを、簡便
で侵襲性が少なく客観的であるという特
徴を活かして、日常臨床の治療訓練に応
用したことです。このような日本独自の
訓練法ができることには意義があると思
います」と語っている。

「この結果をもとに、脳障害や発達障害
などの高次脳機能障害にも活用したい」
と、中山教授には新たな課題が早くも生
まれてきたようである。

（九州・広報 原田ちはる）

「中越沖地震」義捐金
募集活動のご報告

去る七月一六日に発生した「平成
一九年新潟県中越沖地震」につつま
して、国際医療福祉大学（大田原キ
ャンパス、小田原キャンパス）、およ
び各附属病院・関連施設より総額三
一万二四八円の義捐金募金が集ま
りました。この義捐金は、新潟県共
同募金会の設置する義捐金窓口へ九
月、一〇月の二回に分けて送金いた
しました。ご協力頂きました皆様に
深く感謝申し上げますと共に、被災
地域の日も早い復興を心よりお祈
りいたします。

国際医療福祉大学ボランティア委員会

医療経営管理学科 創立十周年記念シンポジウム

全国初の医療と経営が学べる学科として開設された医療経営管理学科の創立十周年を記念したシンポジウムが、二〇〇七年一月二七日（土）、大田原本校の講堂で開かれた。

「10年後の地域医療を考える」をテーマに、医療経営管理学科の教育研究活動の成果を地域の医療関係者に還元するため、年二回開催している「第九回医療経営戦略セミナー」も兼ねた形での開催となった。



シンポジウムでは「日本の医療の将来像」と題して、高橋泰学科長が基調講演。かつて陸軍の教練用飛行場があった大田原の地で、平和な時代の若者が医療と福祉を学ぶ意義を説きながら、十年間の学科の歩みを紹介した。本論では、後期高齢者が急増する超高齢時代を乗り切るには、病床削減と機能分化、急性期入院医療の密度を上げることなど、「限られた医療資源の有効活用」を、動画を駆使してわかりやすく提言した。

パネルデイスカッション（写真）では、佐藤郁夫・国際医療福祉大学病院長、石崎金市・栃木県保健福祉課課長補佐、下野新聞医療担当の山崎一洋記者に、高橋学科長も加わり、本学科教員丸木一成の司会で、地域医療をテーマに討論。新たな地域医療計画を踏まえた10年後の地域医療の在り方や人材育成などについて話し合った。産科・小児科医不足の深刻な現状を報告した佐藤院長は、「地域住民の理解と協力、行政の支援が必要」と訴えた。

午前中は、夏休み中の四週間、全国の病院などの現場で実務を学んだ医療経営管理学科の三年生一二〇人による実習報告会も開かれ、実習病院の担当者らも出席、聞き入っていた。

シンポジウム当日は、あいにくの雨模様だったが、栃木県内外の医療福祉施設関係者や高等学校進路指導担当者、

一般市民、学生ら約四〇〇人がつめかけ、熱心に討議に耳を傾けた。

この模様は、翌日の『下野新聞』、『読売新聞 栃木版』で報道され、詳報は一月六日付の『下野新聞』に企画特集として一面を使って紹介された。特集面では、医療経営管理学科第七期生（二〇〇七年三月卒業）の就職率が九九・二％を示した実績や、各界で活躍する卒業生の声も掲載され、紙面を通じて、三〇万を超える県民世帯に広く学科をアピール、学生募集にも貢献した。

準備期間が一月足らずだったが、開催告知にご協力いただいた参事の先生、下野新聞事業局や大学広報室、学科教員の丸木一成となった取り組みのお陰で、十周年にふさわしい記念シンポジウムとなった。（医療経営管理学科教授 丸木一成）

医療福祉学科主催 社会福祉フォーラム

二〇〇七年一月一〇日（土）、宇都宮市の二荒山会館で医療福祉学科主催の社会福祉フォーラムが開催された。

「福祉という仕事の将来を展望する」というテーマのもと、本学大学院の大熊由紀子教授による基調講演とシンポジウムが行われ、雨模様にもかかわらず、多くの参加者を得て盛会となった。

冒頭、医療福祉学科の鈴木五郎学科長より、「福祉の仕事は魅力的なもののだが、十分な待遇が保障されないため、人材難が起きている。若者が安心してこの仕事に参加できるよう何ができるのか、このフォーラムがそれを考えるきっかけに

なれば」との挨拶があった。

続く基調講演では、大熊教授が「誇り、ぬくもり、輝き」を支えるのが福祉の仕事であり、「大切なのは虫の目、鳥の目、歴史の目である」として、国内外の様々な具体例をあげながら、福祉の役割の大きさを語った。

その後のシンポジウムは、医療福祉学科の山崎順子教授の進行で、（社）みずき福祉会 町田福祉園ゼネラルマネージャーの阿部美樹雄氏の、福祉の仕事は人から必要とされているというメッセージを受け、自分が活かされる価値ある仕事である、という発言から始まった。（医 博仁 会 志村大宮病院総務課長の仁野平正義氏は、小中高生のインターンシップの受け入れ等、子どもたちの福祉への関心を高めるための活動の重要性を話された。また栃木市役所保健福祉部政策監兼福祉トータルサポートセンター所長の首長正博氏からは、行政にも福祉の専門性が必要とされるようになり、社会福祉士等の専門職が求められ、その力を活かせるようになっていくという発言があった。いずれも、長年福祉を仕事としてこられた方の実感のこもった、力強い言葉であった。会場には深くうなずきながら、熱心にメモを取る参加者の姿が目立ち、一般にもこの問題に対する関心の高いことがうかがわれた。

限られた時間ではあったが、参加者には福祉の可能性を再確認する貴重な機会となった。

（医療福祉学科講師 永野なおみ）

薬学部フォーラム

二〇〇七年一月一八日（日）、国際医療福祉大学薬学部フォーラム「栃木県から発信する新たな薬学教育と医薬品開発の展望」が、宇都宮市のとちぎ福祉プラザで行われた。

薬剤師の役割や産学官連携による今後の研究開発などについて意見が交わされ、栃木県内の薬関係者のみならず、一般の方を含め約二〇〇名の参加者があった。

第一部では、武田弘志薬学部長による「今、ストレス社会が求める『くすり』とは」と題した基調講演が行われた。スト

レスの分類や現在使用されているストレス性疾患の薬についての解説、また、ストレス性疾患の病態はまだ解明されていないところも多く、今後も病態の解明やストレス性疾患の予防薬、治療薬の開発が必要であり、産学官連携による開発が



話に聞き入っており、薬剤師の現状やこれからの薬剤師に求められること、そして今後の薬学部の教育方針について理解して頂けたのではないかと思う。

今後も、薬学部としては、栃木県内の多くの薬関係者や一般の方に対して、薬に関する情報を積極的に発信し、貢献していきたいと考えている。その足がかりとしての今回の薬学部フォーラムが大成功に終了できたことに對し、本学の関係各位に感謝申し上げます。

（薬学部助教 井尻聡一郎）

必要不可欠であると訴えた。

第二部では、「消費者・患者が求める『くすり』と専門職の役割」と題したパネルデイスカッションが行われた（写真）。栃木県保健福祉部薬務課の宇賀神貞夫課長、栃木県病院薬剤師会の稲瀬實会長、中外製薬の町田実取締役・宇都宮工場長、国際医療福祉大学病院の山本達生教授、薬学部の旭満里子教授が、薬剤師に求められる能力や、医薬品開発の現状と今後の方向性などについて議論した。議論の中で、今までの薬剤師は医療の現場に参加することは少なく、顔の見えない存在であったが、これからは、薬剤師も医師と協力して、薬物治療に参加することが必要である、とパネリストから訴えがあった。

栃木県内の薬事行政、医薬品産業界、病院や薬局など、さまざまな分野からの、薬学部への期待の大きさがわかり、今後、県内外で活躍する薬剤師の育成に對して、更なる努力が必要である、と改めて感じるパネルデイスカッションであった。

第一部、第二部とも、参加者は熱心に話に聞き入っており、薬剤師の現状やこれからの薬剤師に求められること、そして今後の薬学部の教育方針について理解して頂けたのではないかと思う。

今後も、薬学部としては、栃木県内の多くの薬関係者や一般の方に対して、薬に関する情報を積極的に発信し、貢献していきたいと考えている。その足がかりとしての今回の薬学部フォーラムが大成功に終了できたことに對し、本学の関係各位に感謝申し上げます。

（薬学部助教 井尻聡一郎）

私の主張

第7回

国際協力として働く、途上国で暮らすということ

保健医療学部作業療法学科助教／JICA草の根プロジェクトマネジャー

林由美子

ーシヨンスービスの質も、日本のそれと変わらないレベルに達しつつある。

一方、途上国で暮らすにはこちらが適応するしかない。ベトナムでは、列に並ばず割り込みする、人にぶつかっても何も言わない、買物物では騙されるほうが悪い、時間は守らないのが習慣である。五〇円のものも千円で買われ、プロパンガスの交換も三日待った。割り込むおばちゃんに「列に並んでよ」と怒りたくても、怒るベトナム語を知らない。にらむ私におばちゃんは平気である。今では「おばちゃんも何か急ぎの用事があるのだろう」と、少しずつベトナムの習慣を受け入れられつつある。

こんなベトナムだが、優れた文化もある。家族を大切にし、目上の人を敬い、物を修理しながら大切に使い、暮らしに多くの工夫が見られる。子供はよく外で群れて遊び、大人は見知らぬ人にも気軽に声を掛け合う。「ここに座りな」とバスで席を指定されたこともある。最近、大学生らしき男性が見知らぬ同世代の女性に席を譲っているのを見かけた。ベトナムには、女性の日が二度あり、母の日もある。昼間から酒を嗜んでいる男性は多く見かけるが、女性に感謝する習慣はあるのかもしれない。

国際協力の現場で働き、途上国で暮らすことは、それなりの覚悟はいる。それでも、これからという国のこれからを現地の人々と共に創っていく魅力は大きい。この先、本学卒業生の一割が海外で活動している状況ができれば、「国際」という名にふさわしい母校になると思う。学生の皆さんには、異文化に触れる勇気を持ち、世界に視野を広げてほしいと期待する。

「自然なお産」を支えるために 全力で取り組んだ助産学実習

厚生労働省の助産師教育において分娩の取り扱いについては、学生一人につき十回程度と定められている。それに基づき私も十例と一例（緊急帝王切開）のお産に関わらせていただいた。中には経過が早く、一時間以内のあったという間のお産もあった。たとえ時間が短くても、限られた時間の中で自分が出来るケアを一杯することはもちろん、初対面の産婦やその家族と信頼関係をいかにして築くか、ということに苦労した。私の関わり方、ケアはあれで良かったのか、信頼関係は築けていたか、産婦にとっていい出産体験となったのか……。お産の振り返りでは毎回反省だらけであった。しかし、学んだことも多く充実した実習だった。

お産は女性の本能である。それはとても素敵で自然なこと。だからこそ女性がありのままの自分の姿をさらけ出せるようなお産の環境を整えることが必要なのだと思いを通じて感じた。また、助産師は正常な分娩経過をたどるようアセスメント、判断するだけでなく、産婦が「自分で産んだ、良かった」と実感できるように支援することの大切さも学んだ。助産師がお産に関わるのは一瞬であるけれど、家族にとっては一生のうちでも大きな出来事であるし、お産の体験は今後の育児や生活にも影響を与える。助産師はあくまでも脇役。産婦と家族が主役になれるようなお産をサポートしていきたい。（看護学科四年助産科目履修 千葉千尋）

言語聴覚士国家試験の 全員合格を目指して



合格を目指して真剣な眼差し

言語聴覚学科の四年生は、臨床実習を四月から一月まで、校内の言語聴覚センターと全国各地の病院・施設で行ってきた。おのおの学生が、臨床実習で学んだことのすべてを今後の勉強や現場に出でからの臨床に役立ててほしいと思う。

臨床実習が終わり、四年間の学業の総決算でもある言語聴覚士国家試験に向けての対策が本格的に始まっている。すでに、数多くの模擬試験を経験し、対策講義も始まっている。グループ学習として、学科の演習室を数名のグループに割り振り、タイムカードによる時間管理を行い、生活リズムの構築と適切な学習時間の確保に努めている。

学科事務室に質問に来る学生が増えてくるのもこの時期であるが、その質問内容が徐々に高度な内容になってくるのを見ると、学習の成果が現れてきているのだと感じる。

二月十七日の国家試験本番に向け、学生・教員が力を合わせて全員合格を目指している。

（言語聴覚学科助教 谷谷信一）

第11回学長杯 英語スピーチコンテスト

二月五日（水）、大田原本校にて二年ぶりに学長杯英語スピーチコンテスト（The 11th IUHW President's Cup English Speech Contest）が開催され、約五〇〇名の聴衆を前に学生たちが日頃の英語コミュニケーション活動の成果を競った。その結果、オリジナル・スピーチの部では藤井千裕さん（医療福祉学科二年）が、暗誦の部では佐藤珠江さん（理学療法学科二年）がそれぞれ優勝した。



▲表彰状と記念品を手に満面の笑みを浮かべる、スピーチ部門優勝の藤井さん

過去一〇回の大会とは異なり、今年初めてオリジナル・スピーチの部を導入したことで、発表者が英語を通じて医療・福祉系学生としての心情を吐露する機会が提供された。

オリジナル・スピーチの部では予選を通過した五名が発表。優勝した藤井さんのスピーチ《English And Me》は、ニューヨークでの留学体験が英語のスキルを伸ばすだけでなく、自信と積極性を身につけるのに役立ったこと。また、日本人としての確固たるバックグラウンドを持つ必要性を感じたことなどを綴ったもの。将来は海外で医療福祉分野の仕事につくのが夢であることを述べて結んだ。第二位には小澤昌治君（医療経営管理学科四年）、第三位には北上守俊君（言語聴覚学科一年）が入った。

暗誦の部では七名が発表。優勝者の佐藤さんはBradley Trevor Greiveの詩《The Blue Day Book》を情感豊かに表現。発音、イントネーション、流暢さのいずれもネイティブライクで、聞く人を酔わせた。第二位には上部甲鏡香さん（作業療法学科三年）、第三位には永田曉子さん（視機能療法学科一年）が入賞を果たした。

表彰式後には主催者である谷修一学長が英語で挨拶。また、審査委員長の伊藤元信常務理事とゲスト審査員で映画監督の諏訪淳客員教授が講評を行った。（語学教育部教授 柳澤順一）

フランスから視能訓練士 セレーナさんが来訪

一月一四日、フランス人のセレーナ・ジェロニミさんが視機能療法学科を訪ねて来られた。セレーナさんは、マルセイユ医科大学視能訓練士学科を二〇〇四年に卒業し、視能訓練士免許を取得。マルセイユで眼科医の助手を務めた後、パリで開業された（フランスの視能訓練士は開業ができる）。今回、視機能療法学科三、四年生を対象に、フランスの視能訓練士教育システムや現状について、流暢な日本語でプレゼンテーションをしていただいた。学生も外国の視能訓練士について学ぶことができ、短い時間だったが国際交流を楽しむ機会となった。そのあと、三年生の学内実習や大学キャンパスを見学、谷修一学長と面会し、新井田学科長を交え英語でなかなかの会談を行った。セレーナさんは帰国された際、今回の本学での見学についてフランスで報告される予定である。

（視機能療法学科講師 三柴恵美子）



セレーナ・ジェロニミさん

大学院オープンキャンパス 初めての開催

一月三〇日、二月一日の二日間、国際医療福祉大学大学院としては、初の試みである「大学院オープンキャンパス in 福岡SC」を開催した。医療・保健・福祉分野の高度専門職・研究職を目指す人々に、福岡SCを知っていただくことを目的に企画したもの。

二日間で予想を超える参加があり、熊本や長崎より訪れた人もいた。両日ともに、通常授業の見学や、遠隔システムについての説明、各分野担当教員との個別相談などが行われた。（写真）

参加者のほとんどが社会人であるため、授業時間やカリキュラム等に関する質問、福岡・大川SCでの研究分野に関する質問などが寄せられた。



「受講に対しての不安があったのですが、遠隔授業の体験によって、それが解消できました」、「目的の分野の先生と直接お話しすることができ、理解が深まりました」などの感想が聞かれた。

今回の結果分析を元に、開催時期や曜日、時間帯等の検討を行い、今後につなげていきたいと思っている。

（大学院福岡SC事務部 原田紀子）

学生&企業研究発表会で 本学学生が金賞を受賞

二月一日（土）、栃木県宇都宮市の作新学院大学において、とちぎ大学連携サテライトオフィス主催の「第4回学生&企業研究発表会」が開催され、本学からは次の皆さんが、知事賞に次ぐ金賞をはじめ各賞を受賞した。

●口頭発表部門（医療福祉部門）

〈金賞〉

「身長差は移乗介助動作時の腰部負担に影響するか」理学療法学科 田中惣治・井川達也・尾崎祐一郎・黒川貴志・竹山篤史・村上憲治・室井恵真

〈栃木県電機電子工業会賞〉

「在宅酸素療法をおこなっている人の外出支援について」看護学科 塚田絢

〈医療福祉ルネサンス賞〉

「起きあがり動作における重心移動分析」理学療法学科 渡邊さやか・漆崎尚子・太田好美・山本桂子

（東京事務所出版広報室）

一年生対象に「生活安全講話・セクハラ防止講習会」を開催

風花祭を翌日に控えた一〇月一二日（金）の二時限目、大田原本校F101教室及びE101教室において、一年生を対象に「生活安全講話・セクハラ防止講習会」が学生委員会・セクハラ防止委員会の共同主催により開催された。

今春入学した一年生も学校生活・私生活に慣れ、気持ちにもゆとりが出て来る時

期であり、被害の未然防止を図るため、「犯罪被害の未然防止のポイント」や「セクシュアルハラスメント防止」について専門家による講演が行われた。

生活安全講話は、大田原警察署生活安全課の薄葉光夫課長を講師に迎え、ビデオを用いながら、被害に遭わず安全に生活を送るための諸注意が話された。

セクハラ防止については、本学のセクハラ相談員である語学教育部の宮崎路子先生、総合教育部の小林真理子先生（臨床心理士・学生相談室相談員兼務）、学生相談室・臨床心理士の木下愛子相談員、総務課の高石和秀課長がそれぞれ、セクシュアルハラスメントとは何か、本学の方針についてわかり易く解説を加えた。

当日は大学祭前日で、準備のための休講日にもかかわらず、出席九二二人、出席率九三・九％であり、終了後のアンケート結果も好評であったため、次年度以降も内容を工夫・検討しながら継続実施の予定である。

以下にアンケート結果を一部紹介する。

◆話の内容

①生活安全講話「とてもわかりやすい」「わかりやすい」が全体の八八・七％

②セクハラ防止講習「同八六・九％」◆役にたつ内容だったか

①生活安全講話「とてもそう思う」「少しそう思う」が全体の八六・七％

②セクハラ防止講習「同八三・二％」◆セクハラ防止講習会を今後も続けてほしいか

「とてもそう思う」「少しそう思う」が全体の六〇・八％

（セクハラ防止委員会委員長／理学療法学科教授 藤沢しげ子）

サークル紹介 第三回

ピアカウンセリング部

保健医療学部看護学科三年
ピアカウンセリング部 飯村美香

ピアカウンセリングとは、相手に対して仲間意識を持ち、人間の成長と心の健康に関する知識と、アクティブリスニング（積極的傾聴）および問題解決スキルを用いて行う相談活動のことで、全国で実施されています（「ピア」には「仲間」という意味があります）。

ピアカウンセリングでは、仲間同士が「話し手」と「聞き手」になりますが、「聞き手」がプロではないからこそそのメリットもあります。

私たちピアカウンセリング部が対象としているのは、主に思春期の若者です。思春期の若者にとって、最も身近で信頼できる存在は、親でも、教師でもなく、同世代であり、価値観を共感・共有できる「仲間」



かもしれせん。とりわけ、彼らが関心を持っている性セクシャリティの悩みを相談するようなときには、「仲間」の存在は極めて大きいものがあります。

私たちはこの点に注目して、ピアカウンセリングとして性に関する正しい知識を提供したり、悩みについての相談活動を行っています。県北健康福祉センター（大田原市）を通じ、県内を中心に毎年多くの中学・高校からの依頼を頂き、実際に生徒さんたちと触れ合い、話し合いながら、性に関する疑問や悩みなどの解決へ向けてお手伝いをしています。

ピアカウンセリング部は毎年、風花祭で、『SEX MUSEUM』と題し、性を身近に感じてもらい、正しい知識を身につけてもらうという目的で、性に関連した展示を行っています（写真）。またフリースペースを設け、来場された方が個別相談のできる場として、多くの方に利用していただいています。

福岡市で日本てんかん学会が開かれる

福岡リハビリテーション学部長の満留昭久教授が会長を務める第41回日本てんかん学会が、十一月一日〜二日、福岡市の福岡国際会議場で開催された。

一日の開会式で、満留昭久会長は「福岡市では、アジアに向けての情報発信に力を入れています。このような趣旨に沿ってこの大会では『アジアの小児てんかん』というテーマでシンポジウムを企画しました」と挨拶した。

シンポジウムでは、韓国、台湾、中国、タイ、そして日本から、それぞれの国の小児てんかん医療の現状が報告された。本学会のメインテーマは「てんかん制圧」新たなステージへ向けて」というもので、学会には日本はもちろん、世界各国から、約八五〇人の研究者達が集い、特別講演、教育講演、ワークショップなど様々な内容で、てんかん学の最新の研究が発表された。

今回は、東京女子医科大学脳神経外科の堀智勝教授が会長となることを決定し、二日間の日程を終えた。

（九州・広報 原田ちはる）



介護を元気な集団に「新しい介護を創る研究会」



一月二〇日、国際医療福祉大学大田原本校で「新しい介護を創る研究会」が開催され、全国から約四〇〇人が集まった。会は、大学院の竹内孝仁教授が「高齢者介護を担う人材が半ば絶望して介護の世界から去っていく状況を改善し、介護を元気な集団にする必要があるのではないか」と訴えたことに対し、教育機関としての責任を重く受け止め、大学が運営への全面的バックアップを申し出たもの。

講演で竹内教授は、「自立支援型介護」が状況を改善する鍵であることを説明し、その具体例として、ショートステイ二週間で認知症を改善させた老健施設、入所者の在宅復帰を目指し、在宅サービスと施設サービスの連携に取り組んだ特養からの発表があった。竹内教授は、制度が何かをしてくれるという淡い期待では現状打破はできない。自ら専門性を獲得してプランを考え、結果を出したときの仕事の面白さを知れば、介護の未来は明るい。元気な介護を創っていくため、この会は来年も続けていきたい、とまとめた。

（「介護保険情報」編集部）

中国リハビリテーション研究センター一行が来学

本学と交流の深い中国リハビリテーション研究センターの李建軍主任をはじめとした幹部職員五名が、JICA（中国国別研修）「教育管理」研修のため、一月二八日から一月三日まで日本を訪問。この間、本学各キャンパス、付属施設・関連施設を視察・研修した。

一月二九日、一行は福岡国際医療福祉学院博多キャンパスで、高木邦格理事長と会見、懇談した。その後、福岡市におけるIHWグループのモチプロジェクトや本学大学院の福岡サテライトキャンパスを視察した。

三〇日、三一日は、大川キャンパスを中心に高木病院、柳川リハビリテーション病院などを視察した。大川キャンパスでは、田原弘幸理学療法学科長が教務委員長長の立場から本学部の教育方針と具体的な運営状況を説明。一行からは実習における指導者の役割、学生の配置計画やレポートの内容など、臨床実習に係る質問が集中した。古川昭人作業療法学科長、深浦順一言語聴覚学科長も加わり、当初の予定時間を大幅に延長して、十分な理解が得られるまで一つひとつ丁寧に回答を行った。



写真上：李建軍主任との交流会（10月30日）
写真下：小田原キャンパスにて（11月2日）

一行はまた、大学院の遠隔教育システムに高い関心を示した。奈良進弘教授が張冬さん（中国リハビリテーション研究センターから大田原キャンパスへの留学生・修士課程二年）へ行う、大川と大田原キャンパスを結ぶ遠隔指導に李主任も飛び入りで参加。熱心な提案を行う一方、遠隔システムについては「ぜひ中国への導入を考えたい」と、実効性の高さを改めて確認した様子であった。

三〇日に行われた李建軍主任との交流会には、学生・教職員約五〇名が参加し、お互いの交流を深めた。

一行は十一月一日、東京へ移動し、早速、大学院東京サテライトキャンパス（東京SC）と隣接するグループホーム青山を視察した。大学院の視察では、大川キャンパスのときと同様、本学の最大の特徴である遠隔授業システムや授業のインターネット中継の説明に耳を傾け、具体的な操作方法や、使用している回線のことなどについて大変熱心に質問した。

二日には小田原キャンパスおよび熱海

病院の視察を行い、三日には再び東京SCにおいて、遠隔授業システムを実際に使用した「修士一年研究報告会」を見学した。中国リハビリテーション研究センターがJICA研修で本学大学院に派遣中の胡春英さんも、大田原キャンパスからこの遠隔授業システムで研究報告を行い、大田原の胡さんと、東京SC視察中の一行が遠隔授業システムを通して、近況を報告し合う場面も見られた。

五日から九日にかけては、リハビリテーション専門職の「教育管理」を学ぶため、大田原キャンパスを訪問した。初日の杉原素子保健医療学部長の教育組織に関する講義から始まり、教務課で学籍管理・入学要件・履修・成績等、学生課で学生生活・奨学金等の事務局業務の研修を行い、図書館では図書・雑誌等の資料管理と電子ジャーナル等オンライン情報の利用について学んだ。国際交流センターでは留学生の日本語教育について認識を深めていただき、FD委員会からは教育の質的向上方策について講義を行った。

最後の二日間は、それぞれ理学療法学科と作業療法学科において、学生の臨床実習風景を交えて、リハビリテーション教育の実践について学ぶとともに、日本における各種リハビリテーション実践施設の実態を視察した。

一行は一日に帰国したが、帰国早々、大変有意義で稔りある研修であったことへのお礼と、今後の本学と中国リハビリテーション研究センターとの関係が良好に続くことを祈るメッセージが届いた。

（東京事務所出版広報室）

NITEとMOU協定締結

一月五日、本学と独立行政法人・製品評価技術基盤機構（NITE）との間で、MOU（包括的な連携・協力）協定が調印された。NITEは、生活用品、化学薬品、そして福祉用具などに対する「安心、安全」を保証するための試験や検査の実施、そのための基盤作成を国家レベルで推進している組織で、大学とMOU協定を結ぶのは九州大学に次いで本学が二校目である。協力内容としては、①共通する研究・評価・標準化の推進、②人材育成の推進及び相互交流、③アジア諸国との連携などが掲げられている。

①では、福祉用具の標準化（ISOやJIS）を目的として、NITEは機材などを提供し、大学はフィールドや人材を提供する、というような協力が考えられる。そのテーマを教員や大学院生の研究テーマとすることも可能だろう。

②では、国家戦略として位置づけられている福祉用具の標準化の意味を大学関係者に知ってもらうためのセミナー、福祉用具を使用する障がい者や要介護者の特性などをNITE関係者に知ってもらうためのセミナーの開催などが考えられる。

さらに③では、大学とNITEが持つているアジア各国とのチャネルを利用して共同企画を組むことにより、福祉用具における種々の情報をそれらの国々に流すことなどが検討されている。

多くの方がMOUへ参加することを期待したい。（大学院教授 田中繁）

骨笛

皆川博子 著
(一九九三年初版 集英社文庫 五五〇円)

ミステリーやSF、ホラーを読む人が作品に向かうときの共通点は何でしょうか。もちろんそれがすべてではないでしょうが、これらの作品を、自分を上手に驚かせてくれることを期待しながら読む人がたくさんいるのは事実でしょう。

私たちが強固に信じていたものが、なにか得たの知れないものに変貌していく……かつて、フィリップ・K・ディックやステイブン・キングが得意とした、この「現実崩壊」のレトリックは、そうした読者にとってはきわめて有効でした。

ています。

例えば、ウサギママと呼ばれる女性が経営する喫茶店「カト」に入り浸る、ちよつと変わった少女マユと彼女に好意を寄せている(らしい)少年の高志が登場する『沼猫』にしても、水彩画のような背景に浮かび上がる人物たちの会話や仕草はやや現実離れしています。また、他の話にも登場するマユ(真由)の人間関係が、また別の話では矛盾していて、いったい誰と誰が親子なのか、誰が友人なのか、時間的にも空間的にも妙なひずみが生まれてきます。そして、大人になった真由が「カト」にやってくる最終話でも、大きなオチもなく淡々と時間が流れていくのに、心の中に落ち着かない感動のようなものが浮かび上がってきます。

しかし、この手法は映像に展開されることで、たちまちわかりやすいアトラクションと化してしまつたため、今ではかつて新鮮さを失っています。ただ、こうした派手さとは無縁なところで、独特な「静かな崩壊」を構築してみせる作家もいます。

『骨笛』は皆川博子によって一四年前に書かれた短編集です。収録されている八つの短編は独立しているようで、実は連作の形をとっていることが、読み進めるにつれて明らかとなってきます。いわゆる幻想文学の範疇に入る作品で、一見、どこかの街での日常らしきものが語られるといった風情ですが、そこに描かれる日常はどこかずれて

すべてが説明されない中で、いつのまにかその現実とも非現実ともつかない曖昧な世界に放り込まれ、リアルでないと感じた登場人物に思いついて入っているうちに、気がつく、自分の世界が本物かどうかの自信が揺らぐ静かな恐怖。本来の物語の力とはこういうものではないでしょうか。活字に実用を追い求めすぎている人にこそ経験して欲しい感覚です。

傾向は異なりますが、北村薫とか好きな人であれば、さほど違和感なく皆川ワールドにはまることができると思います。静かだけど心震える奇妙な味わいに興味のある方にお勧めです。

きょうだいが病気になること

小さな子どもが重い病気になって長期入院したという話を聞くと、私たちは、当の子どもはもちろん、お父さん、お母さんも大変だろうな、と思う。しかし、病気の子どもに小さなきょうだいがいる場合、そのきょうだいがどんな思いで毎日を過ごしているか、まではなかなか想像が及ばない。そんな私たちの視角の盲点である「きょうだいが病気になった子どもたち」をテーマにテレビ番組を企画・制作した大学院生がいる。本学大学院修士課程に在籍する三ツ堀祥子さんである。

三ツ堀さんは聖路加看護大学を卒業し、助産師として二年間、病院に勤務した後、医療ジャーナリズムを学ぶために本学大学院に入学した。入学して間もなく、黒岩祐治客員教授(フジテレビ・ニュースキャスター)の授業で、「三〇分のテレビ番組の企画を考えよ」という課題を出された。提案したのが「きょうだいが病気になったこと」であった。

三ツ堀さんは自らリポーターとして資料集めや取材活動をするほか、ゲストの出演交渉、ナレーション、編集なども担当、番組制作のプロたちにも助けられ、三〇分番組二本を完成させた。番組は「きょうだいが病気になったこと」もまた①ママ、私のことも見て!」「同②きょうだいの支援のゆくえ」と題して、一月、二月に放送された。病気の子どもだけでなく、そのきょうだいの目も向けてその「思い」を知り、私たちの隣で独りぼちになっていることもまたに、そつと声をかけられる社会になってほしい、というのが三ツ堀さんの願いである。

(東京事務所出版広報室 山内邦雄)



「黒岩祐治のメディカルリポート」。三ツ堀さん(左)、黒岩キャスター(右)。

施設インフォメーション

News: Affiliated Facilities

附属病院

国際医療福祉大学病院

第一回地域医療連携懇談会を開催

二〇〇七年一月一日(水)、地元の方木魚楽において、「第一回地域医療連携懇談会」を開催しました。佐藤郁夫病院長の「大学・地域の先生方との連携を密に行い、より質の高い医療を地域の皆様に提供できることを目指しています」との挨拶から始まり、地域医療連携室の役割の重要性を再認識しました。第一部の講演会では、金澤一郎教授(国際医療福祉大学大学院副院長、日本学術会議会長、元国立精神・神経センター総長)を迎え、



会場内風景(第一部)

「ふるえの診かた」をテーマに、映像による具体的な症例説明がありました。続いて橋本雅章副院長(地域医療連携室部長)から、



地域医療連携室のメンバー

の現状報告がありました。各診療科の特色と担当医師の写真をパワーポイントにより説明することで、地元医師会の先生方に当院診療科を身近に感じていただけたと思います。

第二部の懇親会は、那須郡市医師会会長である大島内科小児科医院の大島健一先生と大田原赤十字病院の宮原保之病院長からご挨拶をいただき、副会長である鈴木内科医院の鈴木潤先生の乾杯により始まりました。会は終始和やかな雰囲気が進み、交流を深める良い機会となりました。

医療は自己完結型から地域内完結型に変わってきています。地域医療は中核病院、かかりつけ医など、各医療機関がそれぞれの役割を明確にし、地域医療を支えていくことが大切となります。地域医療連携室が窓口となり、顔の見える連携が取れるよう努力して参りたいと思います。

(看護部/地域医療連携室室長代理 渡辺靖子)

附属病院

国際医療福祉大学三田病院

第一回三田病院一般公開講座開催

二〇〇七年一月六日、三田病院では初となる一般公開講座が芝公園福祉会館にて開催されました。「食生活と大腸がん」をテーマに講演会、個別相談会、健康チェックを行いました。消化器センター安達実樹教授による講演では、大腸がんについてわかりやすく説明があり、様々な治療法や大腸がんにならないための食生活のポイントが紹介されました。テーマが大腸がんということで、ご高齢者の関心が高く、質疑応答では多くの具体的な質問が寄せられました。講演会後は個別相談会を実施し、安達教授や管理栄養士が直接相談をお受けしたところ、多くの方が利用され、生活上の注意点を熱心に相談されていました。



講演する安達実樹教授

今後も定期的に開催し、患者様、地域の皆様、さまざまな医療情報を提供していきます。

次回の開催は、港区との共催で次の通り予定しています。

- ◆日時 二〇〇八年一月一九日(土) 午後二時より
- ◆場所 港区高輪区民センター 港区高輪一ノ六ノ二五

高輪コミュニケーションセンターがらぎ内 演題 緩和ケアについて

医療安全推進週間

毎年一月二五日を含む日曜から土曜までの一週間は、厚生労働省の定める「医療安全推進週間」です。

三田病院では、二〇〇七年九月より専任リスクマネージャーを配属した医療安全対策室を設置し、医療事故防止と医療安全向上に取り組んでいます。医療安全推進週間には、教育・研修会「転倒・転落防止のための睡眠薬投与の提案」を開催し、また院内初開催となる危険予知訓練(KYT)には、三日間で延べ二〇六名のスタッフが参加し、安心・安全の医療を提供するため、またチーム医療を実現するために議論し、訓練しました。合わせて医療安全への標語も募集し、沢山の応募の中から選ばれた最優秀賞の標語「確認は、声出し 指差し 全員で」は、今後一丸となって取り組む目標となります。

(総務企画課 杉田由紀)



危険予知訓練にて、指差し呼称項目に向かい「ヨシッ!」

① 看護職・再就職支援セミナー
看護部では、七月～十一月に計五回「看護職・チャレンジ再就職セミナー」を開催しました。このセミナーの目的は、「しばらく医療現場を離れている看護職の方々の就職支援」です。セミナーでは化研病院の概要説明の後、最近の医療事情や看護界の動向の説明をし、その後一時間程、採血・簡易血糖測定・点滴準備の三つの技術演習を行いました。参加人数は総勢一五名。千葉県在住者が最も多く、ボランティア歴は二月～三年と幅広い背景でした。参加された方々は、皆さん真剣な面持ちで講義・実技に取り組まれています。セミナー終了後、看護部との懇談会を設け、最初は少し硬かった表情もこの頃には笑顔が見られました。終了後のアンケートでは「大変良かった」「良かった」という評価を得ています。セミナー参加者の中からすでに当院へ入職をされた方や内定者があり、喜んでいきます。

② 院内看護研究発表会
平成一九年度の院内看護研究発表会が一月九日（金）と十一月一六日（金）の二回に分けて開催されました。演題は五つで、「高齢の経腸栄養施行患者の水分増量による排便コントロール」や「抗結核薬の内服自己管理支援における内服習慣づけの効果」など、各部署で抱えている問題を研究テーマとし、調査・考察しました。第二回の発表会には、国際医療

化学療法研究所附属病院

臨床医学研究センター（千葉地区）

看護部の取り組みから



再就職セミナー

③ 「NANDA-I看護診断」研修会
今春から、当院の看護過程の中に「NANDA-I看護診断」を導入することを決定しました。昨年度から主任を中心に学習を進めていましたが、導入の決定に伴い、院内研修を企画しています。講師には、国際医療福祉大学小田原保健医療学部看護学科の藤村龍子教授をお願いしています。開催予定日は、平成二〇年一月一九日（土）と二月一六日（土）で、第一回の一月一九日は講義、第二回の二月一六日は講義のほか、事例検討を予定しています。第一回の講義には、関連グループ病院や近隣地区の病院へ開催のご案内をし、参加を呼びかけております。

（看護部 工藤由美子）

維持期リハビリテーション
維持期リハビリテーションとは、障害のある高齢者などに対する医学的リハビリテーションサービスで、脳血管障害等において、急性期・回復期のリハビリテーションに引き続き実施されます。目的は、機能や能力の低下を防ぎ、身体的・精神的かつ社会的に最も適した生活を獲得すること、患者様が、社会（住み慣れた地域や家庭）復帰して、生き生きとした生活ができることを目指します。

当院は二〇床の医療保険療養病床を有します。病状が比較的安定した患者様に、治療とケア・リハビリテーションを行う医療的機能の役割と、長期の療養を必要とする高齢者や障害のある患者様に、家庭内自立のための生活リハビリテーションや療養介護を行い、在宅復帰を支援する役割の二つを持っています。

普段の活動そのものがリハビリテーションであり、「自分で出来ることは自分でする」の自覚を促し、座位の耐久性・身辺動作能力・移動動作能力などの維持と向上を図ります。さらに、訓練で可能となったことを日常生活に汎化させるために、病棟と連携して病棟内でも訓練を行い、日常生活能力を拡大させていきます。そこでは、歩くことや食べることが困難だった患者様が、歩けるようになったり食べられるようになるなどの改善により、患者様に笑顔ややる気が出て、生活全般の向上が見られることがあります。そし

みずま高邦会病院

臨床医学研究センター（九州地区）

維持期リハビリテーション



マット上訓練

て、病気の後遺症や障害と上手に付き合いつながり、患者様の能力や社会に適應する新たな生活スタイルの確立と獲得により、社会復帰につなげていきます。

必要に応じて、病院での生活リハビリテーションだけでなくとどまらず、自宅退院に向けての家屋調査や住環境整備による住みやすい環境作り、各種福祉サービスや介護保険の利用、福祉機器の導入、家族への介助の仕方などの指導も行います。以上の取り組みや他職種とのチームアプローチにより、家に帰ることをあきらめていた患者様が、家庭復帰可能となることもありました。ご家族に伴われ、「ありがとう」と幸せそうに手を振り、（時にはうれし涙を流しながら）退院される患者様を見送る時ほど、うれしいことはありません。

たとえ病気が完全には治らず障害が残っても、病院を出て社会・家庭で生活を築き直すことができることを実感し、一人でも多くの患者様がそうなるように、スタッフ一同、患者様とともに努力してまいります。（リハビリテーション室）



東伊豆脳卒中ミーティング

院内感染防止対策講習会
二〇〇七年一月二六日（月）、第二〇回院内感染防止対策講習会が開催されました。今回のテーマとしては、〇七年もわが国における患者数が過去最高を記録しつつある「HIV/AIDS」を中心に採り上げ、当院職員約一三〇名の参加により活発な意見交換が行われました。演題は次の通りです。

一、来院後に診断したHIV感染例
① 肝臓瘍・アメーバ赤痢とHIV感染
唐澤英偉教授（内科）
② カポジ肉腫から診断したAIDS
S 三津山信治医師（皮膚科）
③ HIV感染者の手術例
栗山学教授（泌尿器科）
二、HIV針刺し後の対応
伊藤章教授（検査部）
三、針刺し後に予防内服する抗HIV薬
鈴木高弘主任（薬剤部）

国際医療福祉大学熱海病院

附属病院

四、HIV/AIDSの現状と臨床
伊藤章教授（検査部）

東伊豆脳卒中ミーティング

二〇〇七年一月二九日（木）、今回は第一回目となる東伊豆脳卒中ミーティングが開催されました。演題は次の通りで、講演終了後に情報交換の場を設け、院内、院外からの参加者四四名により、活発な意見交換が行われました。

一、脳卒中患者の早期リハビリの患者動向
北川恒美講師（リハビリテーション科）
二、脳梗塞の急性期治療―東伊豆脳卒中ネットワークの構築に向けて
藤井本晴准教授（脳神経外科）
三、急性心筋梗塞類似の心電図所見を示した癌患者の二例
鰐本奈央（臨床検査技師）、渡部まき主任、桐原真梨子、井上のぞみ、織田寛子、浦川英樹（以上、生理機能検査室）、重政朝彦教授、小林俊一准教授、糟谷深医師、峯岸慎太郎医師（以上、循環器内科）
二、死亡症例検討会・第二八回CPC司会 篠永正道教授（脳神経外科）（総務課）

院内学術懇話会
当院では院内学術懇話会を定期的に開催し、各部署間の情報交換や各職員の技術レベルの向上に役立てております。

二〇〇七年一月三〇日（金）、第三〇回院内学術懇話会が開催されました。演題は次の通りで、約一〇〇名の職員の参加により活発な意見交換が行われました。

山王病院

臨床医学研究センター（東京地区）

リニューアル進行中



リニューアル施工後の予防医学センター

平成一二年一月に免震構造の新病院が竣工し、現在地に移転してから七年が経過しました。今後、患者様にさらに快適に診療を受けていただく為に、山王病院では各所でリニューアル工事を実施しております。

その第一弾として、一つ目は、病棟の室内に設置されている家具の床灯台や冷蔵庫キャビネットの補修工事を行っております。長年の使用によって、角が磨り減ったり、ツヤがなくなったりして、患者様には見苦しかったりしていました。それを家具業者に工場に持ち帰っていただき、木材の磨き、再塗装などを施して、



リニューアル施工後の五階病棟エレベーターホール前

新品同様にしたうえで再設置をしています。

二つ目として、五階から七階の病棟の共用廊下、二階・三階の共用廊下などのカーペットの張替え工事を行いました。新たに毛足の長い高級感のあるカーペットに張替えたことにより、患者様の足の負担が少なくなるようになっております。

また予防医学センター・検査室もモダンなカーペットに張替えて、よりくつろいだ雰囲気での検査が受けられるようになりました。

今後も引き続きリニューアル工事は第二弾、第三弾と進行してまいります。（管理課）

国際医療福祉大学アワー

特集 新春トップインタビュー

国際医療福祉大学・高邦会グループ関係者に年頭にあたっての抱負や、大学、大学院、関連施設の現況、今後の展望についてうかがいます。なお番組はインターネットでもご覧いただけます。http://www.iuhw.ac.jp/movie.html



高木邦格理事長



谷修一学長



北島政樹三田病院院長



開原成允大学院院長

国際医療福祉大学大学院 乃木坂スクール

役に立つ福祉用具の今日・明日・未来

介護保険対象の福祉用具を中心とした各種福祉用具について、概要（構造、目的、性能、種類）、使用方法、注意すべき点、対象者、そして、これからの形について解説します。講義では、実際に福祉用具を持ち込み、講師とメーカーあるいは流通の専門家とが一体となり、対話形式で解説を行います。



◀コーディネーターの田中繁教授（国際医療福祉大学大学院）

●医療福祉チャンネル774を見るには

「医療福祉チャンネル774」は衛星放送スカイパーフェクTV! の774チャンネルでご視聴いただけます。

ご視聴には、スカイパーフェクTV! 専用アンテナ&チューナーをお部屋のテレビにつなぐだけ!

○視聴料・・・月額2,100円（このほかに、スカイパーフェクTV! 加入料・・・2,940円（初回のみ）・スカイパーフェクTV! 月額基本料・・・410円がかかります）

法人契約・・・5,250円

○IUHW学生、マロニエ会会員、教育後援会会員の皆様は、特別視聴の制度があります。下記までお問い合わせください。

●視聴に関するお問い合わせは

フリーダイヤル 0120-870-774（(株)医療福祉総合研究所 お客さま係） Eメール info@iryofukushi.com HP www.iryofukushi.com/

新ビジュアルがん事典

将来は2人に1人ががんに!



がんは死因の3分の1を占め、高齢化に伴い、将来は2人に1人ががんになると言われています。がんを部位別に取り上げ、その特徴から検査や治療法、ライフスタイルとの関連など、がんの実態を映像や図を交え、専門医が詳しく解説します。現在、肺がん・胃がん・大腸がん・乳がん・肝臓がんを放送中。

◀写真上：注目される光線力学的療法（PDT）
写真下：内視鏡検査

福祉住環境コーディネーター2級受験講座

7月実施予定の試験に向けて開講!

福祉住環境コーディネーターは、医療・福祉・建築について体系的で幅広い知識を身につけ、バリアフリー住宅への建て替えやリフォームのコーディネートを提供します。また、福祉用具や諸施策情報などについてもアドバイスするなど、現在幅広いニーズのある資格です。



◀講師の野村敬教授（国際医療福祉大学大学院）

広報誌 IUHW 72号

発行：学校法人 国際医療福祉大学

〔大田原本校〕広報委員会

栃木県大田原市北金丸2600-1 ☎0287-24-3000

〔小田原キャンパス〕

神奈川県小田原市城山1-2-25 ☎0465-21-6500

〔大川キャンパス〕

福岡県大川市榎津137-1 ☎0944-89-2000

〔東京事務所〕出版広報室

東京都港区南青山1-24-1 ☎03-5775-2505

デザイン：iDept. 写真：下野新聞、鈴木慎平ほか

編集：東京事務所出版広報室

©国際医療福祉大学 2008 Printed in Japan 禁無断転載・複写

お知らせ

IUHW Information

学位記授与式（卒業式）、入学式のご案内

平成19年度 学部学位記授与式ならびに大学院学位記授与式の日程

●大田原キャンパス

日時：平成20年3月7日（金）10：20～

会場：那須アスリーナ1階

平成20年度 学部入学式ならびに大学院入学式の日程

●大田原キャンパス

日時：平成20年4月4日（金）10：20～／会場：那須アスリーナ1階

●小田原キャンパス

日時：平成20年4月3日（木）時間は未定／会場：体育館

●大川キャンパス

日時：平成20年4月7日（月）時間は未定／会場：講堂